福岡の大空襲

福岡市西区　　大渡　昌司

その時、昭和２０年６月１９日、私は福岡市東堅粕に住んでいました。福岡空港から博多駅方面に少し寄った所で、現在の博多区豊町のすぐ近くです。福岡空港は、当時まだ田んぼの真ん中に、陸軍の席田飛行場として建設工事が進んでいました。米軍側の捕虜達も、工事に多数が従事させられていました。工事現場の周囲は、金網でフェンスが張りめぐらされていました。銃を持った憲兵の監視も厳しかったので、あまり近づけませんでした。練習機が、離着陸できる程度の滑走路は出来ていましたので、陸軍の小型機がよく飛んできていました。

しかし、そこに高射砲陣地ができているのを知ったのは、福岡大空襲の夜のその時でした。

その日、６月１９日午後に、警防団の人が回って来て、今夜は大空襲があるので貴重品は火鉢の中に入れて畳の床の下に埋めておくようにと、中学１年生の私にも告げて行きました。床の下には、家族用の防空壕も掘っていましたし、空襲警報のたびに、その防空壕にいつも入っていました。貴重品も火鉢に入れて、すでに埋めていました。

その当時になりますと、アメリカ側は、爆撃予告をしていたのであります。そして、そのとおり、その日夜の１１時頃だったと思いますが、警戒警報に続いて空襲警報のサイレンが鳴り響きました。私達家族の防空壕は、家の床の下の他に、すぐ近く、３０ｍ位の所の川土手にも４、５名ほど入れるものを作っていました。その日は、そこに入ることにしました。いつものとおり、防空頭巾をかぶって入りに行きました。川土手に作っているので、空は広い範囲に亘って見渡せました。そして、私は壕の入口から空を眺めていました。すると間もなく、照空燈が４、５本空高く照らし始めました。その数はだんだんと増えて、福岡市の上空一帯に、その数は２０数本にもなりました。そして、敵機を探し求めて各方向に、ゆっくりと動き回っています。まさに、初めて見る不気味な美しさの光景でありました。

その時、２、３本の照空燈が、Ｂ２９の機影をハッキリととらえました。２機の小編隊です。南西の方向、背振山の方向より、北東の方へ向かって侵入して来ました。照空燈はＢ２９をクロス状に捕らえて、ずっと追い続けていました。そしてまた、すぐ後に２機、そしてまた２機と次々と２機の編隊で続いてきました。空を見つめていた私の上の空から、一面火の雨が降り始めました。それは、火の凄さというより、音の凄さに身震いを感じました。『シャー、シャー』という、音というよりは空一面から落ちて来る花火の響きでありました。ある時は、数十本にも見え、ある時は数百本にも見えました。火の光は、上から下へ、また下から上へと、動きながら落ちて来るようでした。それは、油の塊が燃えながら落ちて来る油脂焼夷弾でありました。

そのとき、防空壕をゆるがす地響きと同時に、砲弾が風を切る音、『ピューン』というもの凄い鳴動が空を切りました。すぐ近くの席田飛行場の高射砲が、対空砲火を始めたのです。高

射砲弾が風を切って飛ぶ音の凄さも大変なものでした。

その当時、福岡都市圏防空の高射砲陣地は、席田の他に六本松の陸軍基地と箱崎浜の３ヶ所にあったと聞いていました。その３ヶ所から集中砲火が始まりました。

焼夷弾は、自宅付近へ落ちて来るように見えました。その時、横にいた姉が「防火用のバケツを家から持ってきておいたが良い」と私に言いました。「うん」と私は言って、すぐに壕を飛び出そうとしましたが、足がすくんでいたのか暫く動けませんでした。

真上の空一面に落ちてきているように見えた焼夷弾は、博多駅前周辺に落ちたようでした。真っ暗な市内から、火災の火の手が上がり始めました。空には照空燈に照らされたＢ２９が、次々と２機の編隊で飛来して、焼夷弾を落とし続けていました。市内の火災は、時間と共に各地が大火災となっていきました。それと同時に、空のＢ２９の銀色の機体が、大火災を反射して真赤になって飛んでいました。福岡市が、地上ともに断末魔の様相と変わっていくのを恐ろしく感じていました。対空砲火も、席田飛行場の高射砲は、後で聞きましたが、最新型で飛距離も高くなったそうですが、Ｂ２９は、それを上回る高度で悠々とさえ見える飛行をしていました。

空襲は、２時間余り続き、来襲したＢ２９は延べ２２０機にも達しました。そして福岡市の約４分の１の建物や家屋が焼失しました。被災した人の数は約６万人、亡くなった方は約１０００人に及ぶ被害が出ました。

明くる６月２０日、私は博多駅前まで歩いて行きました。通常ならば、駅前から市内電車に乗って西新まで行っていました。その日は、駅前まで来たとき、その街の光景の変ぼうに唖然としました。駅前から博多湾まで、焼野ヶ原で海が見えました。そして、電車通りには、ワイヤロープの巨大な金網に見えるものが、道路一面に延々と落ちていました。良く見ますと、それは市内電車の架線だったのです。全部燃えてしまったので、支線もすべて道路上に落ちていたのでした。私は電車道を避けて、川端方向へと歩き始めました。道路の両側は全部焼失して、まだ所々煙が立ち上がっていました。中洲も天神方面も全焼していました。焼け残ったビルのガラス窓は、アメのように曲がって落ちていました。そして、焼死体があちこちに横たわっていました。ムシロをかけて、枕元に線香をたいているものもありました。しかし、家族の姿はありませんでした。川端あたりまで行ったとき、同級生から、学校は今日は休みということを聞きました。数日後、初登校をしたときに、同級生で土居町に住んでいたＩ君が、十五銀行の地下で犠牲になったことを知りました。土居町にあった当時の十五銀行地下室は、付近の人の避難場所になっていましたが、閉めていたシャッターが停電のため開かなくなったため、数人の方々がそこで亡くなられました。Ｉ君は、明るくて物語の上手な友人でした。冥福を祈ります。

戦争中は私も、あと何年、いやあと何ヶ月生きられるか、との思いで毎日を過ごしていました。